(2) 当院においての川崎病の動向―全国調査と比較して―

医療福祉学部　子ども医療福祉学科　荻田聡子

1967年に川崎富作博士が，手足の指先から皮膚がむける症状を伴う小児の「急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群」として発表された症候群が，博士の名前をとって川崎病という病名になった．乳幼児期に多く，原因はまだわかっていない．人種間の差もあり，アジア系に多い．全国調査と性別・発症年齢を比較すると全国調査では男児が多かったが当院では男女比はほぼ１：１で, 2013年以前の当院の報告でも男女比はあまり変化がなかった．発症年齢もやや上であった．合併症のうち最も問題となるのが冠動脈障害であるが，全国平均では後遺障害として残存したのは2.3% であるが当院では0.02% であった．これは初見からγグロブリン不応例をしっかりと予測し，不応例と考えられたものには積極的にステロイドを併用しているからではないかと考えられた.